

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

アクセル・ワールド Lone metal .

### 【作者名】

過労死志願

### 【あらすじ】

加速世界に存在する王は確かに七人だけだ。

だがしかし、LEVEL9に至ったアバターが彼らだけかと問われれば実はそうではない。

未知を踏破し、好奇心を満たすため、東京ではなく無限に広がる加速世界を旅するその少年の名前は……イリジウム・クラッシャー。

加速世界唯一の探検家であり、コブシひとつでレベル9の地位までのし上がったロータスとは違う意味での超近接戦闘闘戦のスペシャリスト。

そんな彼を待っているのは……絶望か、はたまた希望か!!

ロータス「何書いているん……クラッシャー。なんだこの末尾の文？ お前こんな文が似合うシリアスなキャラじゃないだろ」

クラッシュジャー」ちゃん、おめでとう「!?!

## アクセセル・ワールド 1 one metal .

加速世界、無制限中立フィールドの杉並区。そこにいた巨獣級エネミーは現在死の危機に瀕していた。

明らかに堅そうな鱗を持つ巨大な蛇のようなエネミーだったが、その鱗は現在無残に砕けており、体中から血のような液体を垂れ流している。

「いやいや〜。久々にこっち帰ってきたら熱烈歓迎大歓迎やな〜。さすがは東京付近。だてにバーストリンカーたちがたまつとるわけぢやうわ」

たった一人で挑むのは自殺に近いといわれる巨獣級エネミーを前にして、軽く気の抜けた雰囲気話しかける一人のM型アバターが、このとんでもない事態をひき起こした元凶。特にこれといった特徴もない、ただの《鉄》<sup>アイアン</sup>のメタルカラーと思われる色彩の装甲を黒いロ―ブ式マントの強化外装で包みこんだそのアバターは、余裕あふれる態度で満身創痍の巨大なエネミーに近づいていく。

「ほなまあ、俺の土産話の締めには……いっちょ、死んでくれや」

その言葉と同時にアバターの足元が爆発した。それと同時にそこから打ち出されたM型アバターは弾丸のような速度でエネミーに向かって突っ込んでいく。

必死にそのアバターから逃れようとするエネミー。しかし、今までの戦闘のダメージがエネミーに自由な行動をとらせない。

そして、男は瞬く間にエネミーへと到達し、

「ゴブシを、一振り！」

「セカンド・インパクト二重の極み!!」

一撃必倒の一撃が、エネミーの体を粉碎した!!

………

「え？ レベル9って、まだいたんですか!？」

「まあ……あれは立場上王とは呼べないからな。本人も嫌がっているし……とはいえ、あいつを知っている人間なら必ずあいつのことはこう呼ぶよ。《鋼の王》と」

この事件はこんな会話から始まった。今回は珍しく黒雪姫と一緒に帰宅していたハルユキは、純色の王たちについて興味本位で話を聞いていたのだが、そのとき黒雪姫がふと思いついたかのように「ああ……あと、正式に王とは呼ばれていないが、レベル9に至った男ならいる」と、ハルユキに教えてくれた。

「でも、レベル9に至るようなすごい人が、どうして王に数えられていないんですか？」

「簡単な話だ、ハルユキくん。あいつは自分のレギオンを作っていないんだよ。生来群れるのが嫌いな性質らしくて……。対戦を挑めば相手はしてくれるし、友人も多いが、なぜかレギオンだけは作らなかった。おまけにあいつは対戦よりも加速世界に観光に来ている奴だしな……。住居は間違いなく東京なんだろうが、大体は無制限中立

フィールドにもぐって、日本中のあらゆる場所を探検しているらしい」

「へ〜。変わった人なんですね」

ハルユキがそんな風に加速世界を楽しむ人もいるんだな……。と、感心しつつ先ほど自販機で買ったジュースを口に含んだときだった。

「あとハルユキくん。あいつの存在を教えたからには君に教えておかなければならないことがある。あいつの耳が届くところでは決して言うてはいけない……禁句についてだ」

「禁句？」

「ああ、君なら何か不用意に言ってしまうそうで怖いから一応教えておく。いいか、あいつに言うてはいけない言葉は……」

黒雪姫がそこまで言った時だった。

突然世界が静止し、ハルユキは現実とは違うもう一つの世界へと引きずり込まれる。

「っ！ 対戦!!」

HERE COMES A NEW CHALLENGER!!

の文字が目前に浮かび上がり、ハルユキは自分の体に変化することを感じる。

伸びる手足に、細くなる体。そして、背中に感じる二枚の翼が折りたたまれた装甲。

そう、ハルユキはその姿を、加速世界で唯一の飛行アビリティを持つアバター……シルバークロウへと、その姿を変貌させた。

「今日は一体誰なんだ？」

今まで黒雪姫と話していた時とは違う、対戦用に鋭い感覚へと意識を移行させながら、クロウはあたりを見回す。

その際、最近ではすっかり姿を隠さなくなったブラックロータスの姿が観客席にあるのを確認したクロウは、さらに気合を入れなおし対戦相手の名前へと視線を移した。

「えっと……何て読むんだこれ？ い、イリ？」

「《イリジウムクラッシュャー》や、カラス君」

次の瞬間、明らかに闘志も何も感じられない気の抜けた軽い声が対戦フィールドに響き渡り、対戦相手が姿を現した！

まるで一昔前のヤンキーみたいな格好だ。鋼色のズボンに、腹部にさらし。上半身は腰までしか無い羽織を着こんだ極限までの軽装甲。M型にしては珍しい人の顔をしたそのアバターの額には申し訳程度に目元を隠す鉢巻きが巻かれている。そして、翻る羽織の背中には堂々とした悪一文字。

鋼色に輝く包帯で保護された手を振り、そのアバターはクロウに一言！

「ごめん……一つ下の奴の名前押す予定やったんやけど操作ミスった。ドローにしてくれへん？」



「あゝあ。一応君のためをおもてゆつたんやで？ カラス君」

ロータスとクラッシュァーの言葉が同時にクロウに届き、その数秒後、

クロウの頭がわけもわからぬままに爆散消滅した!!

…十…十…十…十…十…十…

「……ちょっと大人げないか、クラッシュァー」

「いや、やめよってゆつたんか！ 明らかに俺のせいちゃうやろ!?!」

クロウが頭が一撃粉碎された後、ブラックロータスに個人メールが届き、黒雪姫はあわててレギオンメンバーを招集。相手が指定してきた無制限中立フィールドに全員を連れて、集合場所へと赴いた。

そこで待っていたクロウを一撃粉碎した相手に向かって、ロータスが放った第一声がこれだった。相手も若干の罪悪感があるのか、あたふたと言いつつながらもほんの少しだけ申し訳なさそうな視線をクロウに向けている。

「あの、マスター……結局この人だれなんですか？」

そんな若干の気安さすら感じる二人のやり取りに割り込んだのは、現在のこのレギオンの参謀的役割をしているシアンパイルだった。

クロウも新人バーストリンカーのライムベルもそのことが気に



なっていたのか、がくがくと頷きながらロータスの返事を待っている。

ましてやクロウは、この男と対戦し完敗している（対戦というよりかは、一方的に突っかかってやられた格好になってしまったが）。正体が気になるのは仕方のないことだろう。

「ああ、そうだったな……クロウ。彼が先ほど言っていた王とは違うレベル9にして、加速世界唯一の探検家」

「昔の通りが良かった名前を使わせてもらっただら、《鋼の王》イリジウムクラッシュャーや。以後よろしゅうな、新生ネガネビユラスの諸君!!」

そして相手が名乗った名前に、新人三人組は思わず氷結し、古参組であるスカイレイカーは「あらあら、もう帰ってこられる時期だったんですね」と、一人のんびりとほほ笑んでいた。

…+…+…+…+…+…+…

「で、今度は何か面白い強化外装でも見つかったのか？」

「いや。それがそんなたいしたもんなくてな。目に入ったエネミー片っ端から狩ってみたんやけど、きりたんぽしか手にはいらんくて……あ、食べる？ 味は保証すんで？」

「しばらく見ないと思ったら……今度は東北方面に行ってきたのか……」

「あとはそつやな……。正体わからんもんがカフカフ笑ったり、壁や床にいるんな注文が書いてあったり、窓の外を空飛ぶ鉄道が横切っていく屋敷にも泊ったわ！ あれ絶対リアルやったら宮沢賢治記念館とかやって!!」

「結構たいしたところだろそれ!!」

「あと、雪山をなまはげ型のエネミーにおっかけられた時はマジビビりしたな。年甲斐もなく泣いてもうたで。でも必死こいて倒したのに、落したんはやっぱりきりたんぽ……」

「なまはげまで!?!」

「あとは……」

へらへら笑いながら自分の冒険譚を話していくクラッシュャーに、冷静に突っ込みをいれながらもまるで子供のよつに目を輝かせながら(といっても、アバターの目が若干キラキラしている気がするだけだが……)話を聞いているロータス。

そんな主の意外な一面に新人組が驚く中、レイカーは先ほどとりだした机やイスをその場に設置し優雅にお茶をしていた。

「意外かしら？ ロータスがあんな風になるなんて」

「あ、は……はい。今まで強くてカッコいい先輩しか見てこなかったし」

「ちょ、ちょっと意外かも」

「ふふ。彼女だってあなたたちと同じ中学生なのよ?」

レイカーはそう言いながら、まだロータスが王になる前から見られた懐かしい風景に目を向け、ほんの少しだけほほを緩める。

「彼とロータスは同じ時ぐらいにバーストリンカーになったの。おまけに初めてロータスが対戦したのがあのクラッシュャー君。ちょうどカラス君とうちのアッシュローラーみたいな関係なの」

「よきライバルってことですか……」

「よかったわね〜クロウ。元彼とかじゃなくて」

「ちょ!?!」

「ほんとよかったねクロウ……。きみじゃちょっと……ねえ？」

「パイル!?! ちよっとってなに!?! 何言おうとしたの!?!」

そんな風に慌てふためく新人組に苦笑を浮かべつつ、レイカーはさらに説明を続けてくれた。

「ロータス指名手配された後も何かと気をもんでくれたのよ。彼、ほかの王にも顔が利くし、それがなくても加速世界を冒険して誰よりも知りつくしているパイオニア。彼の顔を知らないほかのレギオンの幹部であっても名前を聞けばある程度の敬意は払ってくれるすごい人なのよ?」

「そ、そんな人に僕は説教しようとしたんですか……」

「クロウっ!! 今すぐ謝ってきなさい!!」

「よりよい土下座の形を追求するんだ、クロウっ!!」

「と、とりあえず逆立ちから始めるべきかな!？」

「いや……許すもくそも、そんなちっさいことでレベル9が怒るおもてんの?」

そんなクロウたちの雑談が聞こえたのか、ロータスとの冒険苦勞話を終えたクラッシャーは若干のあきれがにじんだ苦笑いを浮かべ、ネガネビユラスメンバーの元へとやってきた。

「おう、お前がロータスの彼氏なんやってクロウ?」

「って、なんで知ってんですか!？」

「話の合間にいろいろ話してくれたわ。空とべるんやる? すごいな。そこにいる《鉄腕》アトムかて、ジャンプがせいっぱい……」

「あらあら? 何か不名誉なあだ名が聞こえた気がするのだけれど?」

「へへへっ!？」

本当に苦勞のした子を時にした様子もなく気さくに話しかけてくるクラッシャー。そんな彼の言動を見て、クロウはようやく、クラッシャーが自分がした失礼の数々を気にしていないことを信じほっと一息ついた。

まあ、そのあとレイカーがぶっ放した腹パンチでクラッシャーがおなかを抑えてつづくまるのを見て、フルフェイスの下の顔をひきつけたが。

「それにしても……メタルロード鋼の王ですか」

かっこいいな。クロウがそう考えながら、自分も何かカッコいい二つ名ないかな？ とか考え始めた時だった。

「ん？ 一人でレギオンにも無所属で、メタルカラーってことは……。はは。ちょっと、失礼ですけどはぐれメタルのほうがぴったりじゃ……」

あ……。と、レイカーとロータスが思わず息をのみ、あわてて止めようとしたが、

「ん？」

遅かった……。

今までと全く変わらない雰囲気で、クラッシャーが首を傾げた瞬間、クロウの頭が再び爆散する!!

「え」

新人二人が愕然とする中、クラッシャーは復活ポイントに浮かぶ死亡マーカーの文字の真上に立ち、

「ん？ クロウくん何ゆうたんかな？」

「……ちょ、いいいきなり何を!? ブフっ!」

復活した瞬間に再び爆散するクロウ。今度は上半身と下半身が分断。さすがに一撃では死ななかったが、地面に落ちた上半身が再びの



かったらしい。氷結していたパイルとベルはあわててため息をついているレイカーに事情説明を求める。

「実は彼……はぐれメタルって言葉に嫌な思い出があるみたいで、自分のことをそう呼ばれると一気にプツン逝っちゃうの。でも、実際彼一人で旅しているわけでしょ？ 加速世界初期の間はそう呼ばれることが多くて……。そんな不届きものたちを実力行使で口を封じていたらあんな感じに」

「どんな危険な不発弾!？」

「そんな禁句があるなら先に言ってくださいよ!？」

後ろで二人がワーワーわめいている間にも、事態はどんどん深刻化して行く。

「お前が、謝るまで、殴るのを、やめない!!」

「いや、やめろ、やめろ、やめろっ!! 今すぐ辞める!! お前がやるとシヤレにならない!! 割と普通に無限PK状態になるから!! クロウも、早く土下座でもなんでもいいから謝るんだ!!」

「う、うめんなさい、いいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

さすがにたった一言でここまでされると思っていなかったクロウは、恥も外聞もなくあわてて謝罪の言葉を述べた。

「……………」

その謝罪を聞いたクラッシュヤーはいったんコブシを振るのを停止し、少しの間考えるようなそぶりを見せる。







いやまてまて!? お前に殺されるとシャレにならへんて!! うるさいバカ!! いますぐ死ねっ!! と、にぎやかに言い争いをしながら信じられない速度で戦闘を繰り広げじゃれあう二人の王。

もうちょっと、喧嘩の規模がデカすぎて唾然とするしかない新人二人に微笑みを浮かべながらレイカーはサラッと告げる。

「ちなみにああなった時は本人でも歯止めがきかないのは分かっているから、彼自身が自分にかけての固有心意『減損縮小』によって、バーストポイントは減らないの。よかったわね、鴉さん。もとより全損する可能性は皆無だったのよ?」

「いや……バーストポイント云々以前に心がへし折られました」

復活と同時に何かにおびえるように両膝を抱えてうずくまるクロウに、レイカーはあらあらと呟きながら微笑みを苦笑にかえた。

こうして、騒がしい来訪者が東京に帰ってきたことにより、加速世界はさらににぎやかになっていく。

災禍の鎧。加速研究委員会……まだまだこの世界には暗く陰鬱とした闇が控えている。だがしかし、

「ちょちょよ、ロータス嘘やんな!? 寸止めしてくれるやんな……って、あぶなあああああああああああああああ!! おまえ、おれ、俺が白刃取りの技覚えてへんかったら死んでんぞおおおおおおおおおおお!!?」

彼がこの世界にいる限り、加速世界は闇にのまれることはないのだろっ……。

FIN